

アルタイ系具格接辞 *-ji の後裔 (後編)

近藤 健 二

前稿では、アルタイ系具格接辞 *-ji から生じた -i の機能変化に注目した。そして、-i が朝鮮語では形容詞を副詞に転化させるための接辞になったこと、また日本語ではそれが動詞連用形の接辞になったこと、さらに朝鮮語と上代日本語において同じ -i が主格接辞になったことを指摘した。

具格接辞の歴史的発展はそれだけにとどまらない。筆者の考えでは、上代日本語の動詞接頭辞 i- とアイヌ語の動詞接頭辞 e- は、またアイヌ語における人称代名詞の構成要素 -i もかつての具格接辞の後裔である。-i に関する歴史的、類型論的考察は、具格接辞 *-ga、*-ma、*-ti を巻き込みながら、東アジアの諸言語、エスキモー語、北米インディアン諸語をめぐる系統論へと発展していく。

1. 上代日本語の i- とアイヌ語の e-

上代日本語に動詞接頭辞 i- がある。この i- は、『古事記』や『日本書紀』における歌謡、あるいは『万葉集』に収められた歌の中に見いだされる。

- (1) ……^{かむかぜ}神風の 伊勢の海の ^{おし}生ひ石に ^{は もとほ}這ひ廻ろふ ^{しただみ}細螺のい ^{は もとほ}這ひ廻り 撃ちて
し止まむ (古事記・歌謡13)
- (2) 去年の春^こいこじて植^こえし我が宿の若木の梅は花咲きにけり (万葉集1423)

このような i- がどういう意味を表すのか、またどういう機能を果たしているのか、従来の研究ではほとんど何も明らかにされていない。このことは、たとえば『日本国語大辞典』(小学館)においてこの種の i- が「実質的な意味は不明で、ほとんど語調を整えるためのものと見られる」と説かれていることからもうかがえる。

i- が何であるかは、それを上代日本語という枠内に閉じこめて見ている限り分かるまい。i- は、すでに上代において消滅しかかっていたのであるから。あるいは、過去の遺物として歌謡の中のみ姿をとどめていたからである。i- の本当の働き、というより i- の本来の機能を明らかにするには、それを言語類型学ないしは比較言語学の見地から捉え直してみる必要がある。日本語以外の言語に i- と類似したものが見つければ、そこから i- の正体を解き明かすことができるかもしれない。

具体的に、i-を何語の何と見比べたらよいのか。i-らしきものを求めて日本語の周辺を見渡したとき、アイヌ語のe-が目にとまる。e-の主だった用法を知里真志保（1974a：89-92）に従って示してみよう。

- (3) a. poro chise e-horari 「大きな家に住む」
大きな 家 (そこ)に-住む
b. Poropet e-arpa 「幌別へ行く」
幌別 (そこ)へ-行く
c. neampe e-mina 「そのことを笑う」
そのこと(それ)について-笑う
d. emush - e-koiki 「剣で闘う」
剣- (それ)によって-闘う

さて、上に例示されたものを見て次のような疑問がわく。問題の形態は動詞接頭辞として動詞に付着しているのか、それとも後置詞として名詞に付着しているのか。知里の表記法から判断すれば、(3)のaとbとcにおけるeは動詞接頭辞であり、dにおけるeは動詞接頭辞のようでもあり後置詞のようでもある。しかし、このような説明は説得力に欠けている。なぜなら、知里の表記法そのものが機能の違いを厳密に反映したもののようには思われないからである。

ここで歴史的視点を取り入れて、e-の成り立ちを考えてみよう。この点に関してまず最初に指摘しておきたいのは、アイヌ語のe-が具格接辞*-jiと歴史的、系統的に無縁ではないということである。*-jiは満州語、朝鮮語、日本語で-iとなったが、アイヌ語では*-jiが、あるいは*-jiよりもさらに古い形態がi-を経てe-になったと考えられる。(後で触れるように、アイヌ語にもi-あるいは-iという形態が存在し、これがe-とは異なる機能を担っている。)

次に、アイヌ語では本来の具格的意味からいくつかの異なる意味が派生したということも指摘しておきたい。このことは、たとえば、日本語の「で」や英語のofが複数の意味をあわせ持っているという事実から十分に合点がいく。

そしてもう一つ強調しておきたいのは、動詞接頭辞のようでもあり後置詞のようでもある機能こそ原初的なものであり、動詞接頭辞としての機能はむしろ派生的なものではあるまいかということである。言い換えれば、動詞接頭辞にも後置詞にも属しない曖昧模糊としたものが最初にあって、それが名詞項と動詞項との橋渡しをする役を担っていたのではないかということである。そのようないわば中間体が一方で動詞項との結び付きを強めて動詞接頭辞となり、他方で名詞項との結び付きを強めて後置詞となっていっ

たのではあるまいか。むろん、具格接辞*-jiは後者の例である。ちなみに、次に示すeは名詞項と結び付き、あたかも前置詞のような働きをしている。

- (4) a. e-hau-kasu 「声が高い」
 (それ)において-声-過ぎる
 b. e-hur-pesh 「山を下る」
 (それ)において-山-下る

ここまでの考察により、アイヌ語のeがドイツ語の分離動詞における前綴、すなわち分離前綴にいくぶん似ていることが理解される。下に分離前綴の例を示して、アイヌ語のeと比較してみよう。

- (5) a. Er sagt, daß er seine Arbeit *anfängt*.
 b. Er *fängt* seine Arbeit *an*.

上のaでは、anfangen「始める」という分離動詞の三人称単数過去形anfängtが従属節の末尾に置かれている。このような場合、前綴と語幹との分離は生じない。一方bのような場合、述語動詞は後置されない。動詞の語幹部分が主語に次ぐ位置を占め、前綴が文末に置かれるのである。分離前綴のこのような振る舞いは、それが完全には動詞接頭辞にはなりきっていないことを物語っている。アイヌ語のeも概ねそのようなものと見なしてよい。ここで「概ね」と言ったのは、eと語幹部分との結合度がすべての動詞について一様であるとは言い難いからである。たとえば、e-hecire「～で遊ぶ」とかe-hohoki「～で永眠する」といった動詞のeは具格あるいは所格的意味が明確であり、そのぶん、ドイツ語の分離前綴の色彩が濃い。一方、e-horokaramu「～を恋しく思う」やe-kimateh「～をこわがる」などにおけるeは所格的意味が薄れていて、ドイツ語のerzählen「～を物語る」とかverstehen「～を理解する」などの非分離動詞における前綴にやや似ている。つまり、このような動詞ではeと語幹との結合度が強いということである。

ここで、動詞と目的語の関係、あるいはeと名詞項とのかわりについて重要な事実を指摘しておきたい。eには通例、それと意味的に結びつく名詞が先行する。たとえば、ikoro e-hecire「短剣で遊ぶ」という表現においてe-「(それ)によって」はikoro「短剣」と密接にかかわっている。ikoroはいわばeの先行詞である。ikoroはe-hecireという動詞の目的語であると言うこともできよう。しかしながら、ある種の表現に関してはこのような関係が成り立たない。たとえば、e-isankara「～を殺す」、e-kancine「～を焼き延ばす」、e-ciwkara「～を突き刺す」という動詞は「殺す」対象、「焼き延ばす」対象、「突き刺す」

対象を目的語として従えるが、それらの目的語はe-の先行詞ではない。では、何がe-の先行詞なのか。これらの動詞の場合、e-の先行詞は存在しないのか。このことを以下の具体例に即して考えてみよう。

- (6) a-wwen-ekasi nean enean okaankiri enean an-kara
私の-いとしいおじいさんを その こうして わざと こう 私が-やって
an-e-raykikara daka an-e-isankakara daka nah
私が-?-死なせた のだか 私が-?-亡くならせた のだか と
an-eraman kusu..... (藤山ハルの語り『ウエネネカイベ物語』)
私が-思っ て

ここで問題とするのは、*aneraykikara*「私が死なせた」と*aneisankakara*「私が亡くならせた」という部分である。an-は叙事詩語法における一人称接辞であり、「私が」を意味する。*raykikara*は*rayki*「殺す」と*kara*「つくる」とが結合したものであり、「殺してしまう」といったほどの意味を表すと考えてよい。*isankaka*も、*isam*「亡くなる」の使役形*isanka*「亡くならせる」に同じ*kara*「つくる」が付いたものであり、「亡きものにしてしまう」という意味を表すと見なしてよい。残るはe-である。今問題にしている動詞の場合、e-には、先行詞がない。つまり、e-が仮に「(それ)によって」とか「(そこ)において」という意味を表しているとして、「それ」「そこ」が指し示す名詞が文中に見いだせない。したがって、e-はそのような意味を表していないということになる。

ここで発想を転換する必要がある。e-の先行詞が文中に見あたらないということは、e-に先行詞が存在しないということをも必ずしも意味しない。e-の先行詞は含意されているのかもしれない。あるいは、e-そのものに先行詞が内包されているのかもしれない。このように発想して、含意された先行詞あるいは内包された先行詞が何であるかを考えたとき、「身体」「身体部位」、とりわけ「手」という名詞が思い浮かぶ。e-は、典型的には「手によって」「手を使って」「手にかけて」という意味を表すのではないか。このように仮定することで、たとえば*koyki yayne e-isankara*「叩いているうちに殺してしまう」とか*yoomah e-hekemteh rise*「槍を引っ張って抜く」といった表現にe-が現れることが、また*e-raykikara*が通例「叩き殺す」という意味で用いられることが首尾よく説明できる。ちなみに上の(6)の例では、*kenke ciw enciw wa enrayki*「ジジを刺せ、私を刺して私を殺せ」と嘆願するおじいさんを槍で刺し殺してしまった行為について*e-raykikara*という動詞が用いられている。

以上、アイヌ語の動詞接頭辞e-についていくぶん詳しく述べたのは、それが日本語の動詞接頭辞i-の意味解釈に役立つと考えたからである。日本語のi-とアイヌ語のe-はまる

で同じものでもないし、まるで違うものでもあるまい。i-と e-が同源のものならば、両者の間には必ず接点がある。筆者の見解では、先行詞を含意するか内包する用法こそi-と e-の接点である。i-は、身体行為、特に手・足を使った行為について用いるのが普通である。本節の冒頭にあげた(1)の「い^ほひ廻り」はまさに手と足を使った行為であり、(2)の「いこじ」は主に手を使って行う行為である。以下、『万葉集』においてi-がどのような動詞の接辞として現れるかを見てみよう。まずはじめに、「手」とのかかわりが強い行為についてi-が用いられている例をあげる。

- (7) みつみつし^{くめ}久米の若子^{わくこ}がい^ふ触りけむ磯の草ねの 枯れまく惜しも(435)
 (8)朝なぎに いかき渡り 夕潮に いこぎ渡り.....(1520)
 (9) 天橋^{あまはし}も 長くもがも 高山も 高くもがも 月よみの 持てるをち水 い取り来て.....(3245)
 (10) しなたつ 筑摩さぬかた ^{おきな}息長の ^{をち}遠智の ^{こすげ}小菅 めかなくに い刈り持ち来 敷かなくに い刈り持ち来て.....(3323)
 (11) ^{かしまね}鹿島嶺の 机の島の しただみを い拾い持ち来て 石もちつつき破り 早川に 洗ひそそぎ.....(3880)

次に、「足」とのかかわりが強い身体行為についてi-が用いられている例を示す。この種のものとしては、「い行く」という例が目立って多い。「い別れ行く」も同類の表現と見てよかろう。ほかに、「居散らす」や「い立つ」がある。

- (12) 今さらに君はい行かじ春雨の心を人の知らざるなくに(1916)
 (13)大船に ま梶^{かぢ}しじぬき 白波の 高き ^{あゐみ}荒海を 島伝ひ い別れ行かば^{とど}留まれる 我は幣^{ぬさ}引き.....(1453)
 (14)卵^うの花の 咲ける野べより飛び帰り 来鳴きとよもし 橋の花を居散らしひねもすに鳴けど聞きよし.....(1755)
 (15)この道を 行く人ごとに 行き寄りて い立ち嘆かひ わび人は ねにも泣きつつ.....(1801)

上の(12)~(15)は「足」を中心とした行為の例であると述べたが、(13)の場合は「足」ではなく「船」を使った行為である。したがって(13)は、正確に言うと、「足」を使って行う行為を一般に表す動詞にi-が付いた例だということになる。要するに、「行く」という動詞は「足」を使わない場合にも「い行く」という表現が可能であったということである。また当然のことではあるが、「行く」という動詞は「足」を持たないもの

の移動をも表すことができるので、たとえば雲の動きを、「天雲^{あまぐも}もい行きはばかり」(321)のように叙述することが可能であった。ところで、「い行く」に関連して特に注意を要するのは以下のような表現である。

- (16) うま酒 三輪の山 青によし 奈良の山の 山の際に い隠るまで 道のくまい
積るまでに つばらにも 見つつ行かむを……
- (17) …… 辺つ波の いやしくしくに 月にけに 日に日に見れども 今のみに 飽き足
らめやも 白波の い咲き巡る 往吉^{すみのえ}の浜 (931)
- (18) すめろぎの 敷きます国の 天^{あめ}の下^{した} 四方^{よも}の道には 馬の爪 い尽くすきはみ
船^{ふな}の舳^への い泊つるまでに…… (4122)
- (19) あたらしき年の初めに思ふどちい群れて居ればうれしくもあるか (4284)

これらの表現が「い行く」にどう関連しているかを述べる。筆者が考えるに、これらの表現におけるiは「行く」という意味を内包している。(16)では「奈良の山が山際に隠れ行くまで、道の曲がり目が積もり行くまで」という解釈が、(17)では「白波が打ち寄せて行って、一面花の咲くようになる」という解釈が成り立つだろう。(18)については「鳥の爪が至り尽くすまで、船のへさきが行きとまるまで」というふうに、(19)についても「心の通じ合う者同志が寄り集まっておれば」というふうに解釈できよう。それにしても、このような解釈を許すiは上記の6例以外に筆者は知らない。この意味において、それはiの主流を占める用法ではなかった。

さて本節の最後に、文法関係が定かではない以下の二つの表現に触れておきたい。

- (20) 秋萩の恋も尽きねばさを鹿の声いつぎいつぎ恋こそまされ (2145)
- (21) 天地の 初めの時ゆ 天の川 い向い居りて 一年^{ひととせ}に二度^{ふたたび}会はぬ 妻恋に物思ふ
人…… (2089)

上の(20)では「さを鹿の声いつぎいつぎ」の主述関係がはっきりしない。「さを鹿の」が主語、「声」が目的語、「いつぎいつぎ」が「口・体からひっきりなしに出続ける」を意味する他動詞なのか。それとも、「さを鹿の声」が主語で、「いつぎいつぎ」が「口・体からひっきりなしに出続ける」を意味する自動詞なのか。いずれにせよ、問題のiには「口・体から」という意味、あるいは「口・体を使って」という意味が込められているのではないかと思われる。

(21)の「天の川い向い居りて」は、それが単純に「天の川に向かっていて」という意味だとすれば、非常に珍しく興味深い例である。どういう点でそうなのかと言うと、「天

の川」が所格接辞*i*-の先行詞であるという見解が成り立つという点においてである。(21)の表現は先の例(3)にあげたアイヌ語の*e*-を彷彿させる。それは、日本語の*i*-とアイヌ語の*e*-の同系性を裏付ける有力な証拠の一つと見なしうるかもしれない。しかし、(21)は別の解釈をも許す。すなわち、「天の川」の後に格助詞「に」が省略されているという解釈である。この場合、*i*-は「体で」「体を使って」という意味を表すと言えようか。

2. 人称代名詞の成り立ち

人称代名詞の形成にはしばしば具格接辞が関与した。また、しばしば存在動詞が関与した。存在動詞というのは文字通り「存在」を表す動詞のことであり、日本語では「ある」「いる」、アイヌ語では*an* と *oka*、朝鮮語では *it*、満州語では *bi*、ツングース諸語では *bi* か *bii*、モンゴル語では *bi* と *bai* がそれにあたる。

さて、人称代名詞の、特にその主格形の形成に具格接辞がかかわったということは十分に考えられることである。筆者が別の論考で指摘したように、能格言語における能格、すなわち他動詞文主語に特有の形態は具格にその起源が求められるからである。人称代名詞の語幹に具格接辞が付くことによって能格が生まれ、それが主格に転じたとしても何ら不思議ではない。ちなみに北米インディアン語の一つであるクワキウートル語では、以下のように人称を表す動詞人稱接辞は主格と具格が基本的に同形である。これは具格から主格への変化が人称代名詞の領域でも起こりえたことを示す格好の例である。

表1 クワキウートル語の人称接辞¹

	主格	具格
一人称単数	-En (L)	-En (L)
複数		
包含形	-Ens	-Ens
排除形	-Enu ^c χu	-Enu ^c χu
二人称単数	-ES	-ōs
複数		
三人称単数		-s
複数		

問題はしかし、人称代名詞の主格接辞が具格接辞に由来するものであるかどうかということにとどまらない。というのも、人称代名詞のまさに語幹部分の形成に具格接辞が、

また存在動詞が深くかかわっていたからである。これはもちろん、検証を要する筆者の仮定である。

人称代名詞の形成に具格接辞と存在動詞とがかかわっていたと考える根拠を、まずはじめに、アイヌ語の人称代名詞と動詞人稱接辞を示した以下の一覧表に基づいて述べる。

表2 北海道アイヌ語沙流方言の人称代名詞と人稱接辞²

	人称代名詞	主格人稱接辞	目的格人稱接辞
一人称単数	kani	ku-	en-
複数	čoka	či-, -as	un-
二人称単数	eani	e-	e-
複数	ečioka	eči-	eči-
三人称単数	sinuma		
複数	oka		
不定人稱単数	asinuma	a-, -an	i-
複数	aoka	a-, -an	i-

これは北海道南部の沙流方言における人称代名詞と人稱接辞の体系を示したものである。ここで方言差の問題に触れておくと、北海道アイヌ語の中の方言差はさほど大きくない。しかし、たとえば沙流方言とカラフトアイヌ語との間の差はかなりある。下に、知里真志保(1974a: 547)が単にカラフトアイヌ語の人称代名詞としてあげている体系を示す。なお、()内の形は村崎恭子(1976)がカラフトアイヌ語ライチシカ方言の人称代名詞としてあげているものである。

表3 カラフトアイヌ語の人称代名詞

一人称単数	anokai (kuani)
複数	anokaj (anoka、anokayahč'in)
二人称単数	eani (eani)
複数	ečiokaj (ečioka、ečiokayahč'in)
三人称単数	ani ()
複数	okaj ()

アイヌ語における人称代名詞の構成要素として重要なのは、ku-、či-、e-、a-、an-

-oka、-iである。人称代名詞の大部分がこれらの組み合わせによって生成される。そこで、これらが本来どういうものであったのかを探ることが人称代名詞の成り立ちを考えることにつながる。

まず、a-、an-と-okaについて言うと、これらは明らかに存在動詞anとokaに遡る。ちなみに、anは単数のもの、okaは複数のものの存在を表す。次に-iについて言うと、これはもともと具格接辞に由来する連用接辞であった。連用接辞-iが具格接辞に由来するものであることは、すでに前稿で詳しく述べた。

さて、ku-というのは、「私」を意味する。したがって、沙流方言kaniの構成は、もともとku-an-i「私あり(て)」であったと考えられる。同様に、či-は「私たち」を意味するので、čokaは本来のči-oka-i「私たちあり(て)」が人称代名詞となった後で、語尾の-iを脱落させたものであろう。カラフトアイヌ語に見られる語尾の-jは明らかに-iの変異形である。このような筆者の考えは、一つの本質的な点において知里真志保(1974b)の説くところと異なる。知里は次のように言う。

アイヌ語の人称代名詞はもと“to be”を意味するanがそれぞれの人称及び数に於て名詞化した形である。即ちku-an「我あり」e-an「汝あり」an「彼あり」などに名詞法語尾の-iが添つて出来た形であり、それが

ku-an-i	ainu	ku-ne.
我あるやう	アイヌにて	我あり
e-an-i	shisam	e-ne.
汝あるやう	日本人にて	汝あり
an-i	nucha	ne.
彼あるやう	ロシア人にて	彼あり

等の如き構造に於て頻用せられてゐる間に一個の単語として成立するに到つたものであり、本来副詞句として成立し、現在また副詞的にのみ使用せられるものであるから、これらの代名詞は「が」の格(*nominative*)と云ふより、寧ろ「は」の格(*absolute case*)といふべきものである。(51 - 52頁)

知里の所説が筆者の考えと異なるのは、知里が-iを名詞化接辞であったと見なしている点である。アイヌ語の人称代名詞が「本来副詞として成立し、現在また副詞的にのみ使用せられる」のは、-iがまさに連用接辞であったからであると考えるのが自然であろう。

ところで、筆者が考えるように、ku-an-i「私あり(て)」という表現が「私は」という意味、あるいは「私なら」「私としては」「私こそ」といった意味を表す人称代名詞になったことと一緒に、たとえば、emush an-i「剣あり(て)」という表現がemush ani「剣で」とい

う意味を表すようになったという事実を指摘しておきたい。aniがこのように具格助詞になりえたのは、-iが連用接辞であったことによる。このこともkaniやeaniの-iが連用接辞であったという主張を支える傍証となる。

ここで、人称代名詞の歴史のさらに奥深い所にまで遡るため、一つの仮定を述べる。アイヌ語の遠い祖語の段階では、人称代名詞、人称接辞というものは存在しなかった。たとえば、カラフトアイヌ語ライチシカ方言に三人称代名詞が存在しないように、またアイヌ語のすべての方言に三人称の動詞人称接辞が存在しないように、一人称と二人称の代名詞も、そして動詞人称接辞も一切存在しなかった。

そうであったとして、人称代名詞あるいは人称接辞のはじまりは何であったのか。つまり、ku-が「私が」であり、či-が「私たちが」であり、e-が「あなたが」であったりするのとはどのようにして始まったのか。途方もない憶測のように思われるかもしれないが、これを筆者は次のように推定する。すなわち、e-はもともと具格接辞であった。ku-も同種のものであったと考えてよい。一方、či-はもともと奪格接辞であった。が、具格的意味をも表すようになった。そして、カラフトアイヌ語のaniとokajが本来は「彼・彼女・それ・彼ら・彼女ら・それら」をゼロ形態とした表現であったように、ku-は「私」をゼロ形態にした ϕ -ku-「 ϕ により」という表現として始まった。同様に、či-はもともと「私たち」をゼロ形態にした ϕ -či-「 ϕ により」、e-は「あなた」をゼロ形態にした ϕ -e-「 ϕ により」という表現であった。いやむしろ、混沌とした状態、あるいは渾然一体となっていたものからこのような使い分けが生まれたと考えるべきであろう。そしてそうなったとき、ゼロ形態として含意されていた「私」「私たち」「あなた」という意味が接辞の部分に乗り移った。カラフトアイヌ語のaniに「彼・彼女・それ」という意味が生まれ、okajに「彼ら・彼女ら・それら」という意味が生まれたようにである。こうして、含意されていたものが明示されるようになった。その当然の結果として、接辞に備わっていた具格的意味が失われ、ku-とči-とe-はそれぞれ「私が」「私たちが」「あなたが」という主格的意味を表すようになった。このような具格表現から主格表現への変化は、行為者を道具あるいは原因として表す自動詞文が行為者を行為者として表す他動詞文へと変化していったのと軌を一にした変化であったろう。仮に自動詞文の他動詞文化という大きな流れが過去になかったならば、たとえば、ku-は「私が」という意味ではなく「私により」という意味を表すようになっていたと考えられる。

以上の推論が正しければ、アイヌ語の主格人称接辞は、1)単一の具格接辞に由来するもの(ku-, či-, e-) 2)具格接辞に由来する二つの形の組み合わせ(eči-) 3)存在動詞に由来する形と具格接辞に由来する形の組み合わせとと考えられるもの(-as < -a+ -eči-) 4)存在動詞に由来するもの、あるいは存在動詞と連用接辞の組み合わせから連用接辞が脱落したもの(a-と-an)のいずれかである。

一方、人称代名詞には、1)主格人称接辞と存在動詞と連用接辞との組み合わせ(kani、čoka、ečioka、anokaiなど)、2)上記1)から連用接辞が脱落したもの(oka)、3)存在動詞と連用接辞との組み合わせ(ani、okajなど)、4)上記3)から連用接辞が脱落したもの(oka)がある。なお、これら1)~4)に入らないものとしてsinumaやasinumaがある。これらの形態の成り立ちを考えるには、そしてku-とči-が具格的なものであったことを確認するためにも、アジア大陸北東端で話されるチュクチ語、およびそれと境界を接して広大な言語圏を形成するエスキモー語にまで触手を伸ばさなければならない。

下に、チュクチ語とエスキモー語における人称代名詞の組織の概略を示す。両者は一見似ていないように見えるが、その根底において驚くべき類似性を有する。

表4 チュクチ語の人称代名詞³

	絶対格	能格
一人称単数	gŭm	gŭmna'n
複数	mu'ri	morŭina'n
二人称単数	gŭt	gŭina'n
複数	tur'i	torŭina'n
三人称単数	Ena'n	Ena'n
複数	E'rri	Erŭina'n

表5 エスキモー語の人称代名詞⁴

	絶対格		関係格	
	グリーンランド	アラスカ	グリーンランド	アラスカ
一人称単数	ŋa、ra	ka	ma	ma
複数	kka	nka	ma	ma
二人称単数	t	in	wit、rpit	hpuit、hfit
複数	it	tin	wit	fit
三人称単数	a	a、e	ata	an、in
複数	ee	aj、e	isa	aj̄n

チュクチ語の一人称単数絶対格gŭm「私」は、*-gaと*-maが結合したものである。*-gaと*-maはいずれも具格接辞であった。このように判断する根拠の一つは、チュクチ語の一方言とも言えるコリヤーク語でgŭmに相当する語がgŭmmaであるという点にあ

る。そしてもう一つの根拠として、チュクチ語のga-と-maという二つの形態が名詞をはさんで、ga-lêla'-ma「目で」のように用いられるという事実を指摘しておきたい。gümは、「私」をゼロ形態にした*ga-φ-maから生まれた形であると見なしてよい。なお、一人称単数能格gümna'nの-na'nは具格接辞であろう。これは、複数形の語尾がma'nとなっていることから判断して、-iが脱落したものと考えられる。この-iは具格接辞*-jiに連なるものであろう。-na'nは意味を強めるために付けられたものであろうが、確かなことは分らない。ちなみに、チュクチ語の-ineñ、コリヤーク語の-inañは道具を表すための名詞化接辞である。

さて、上に述べたように具格接辞として*-gaと*-maの存在が想定されるならば、そこから次のような仮定が導かれる。アイヌ語の主格人称接辞ku-は*-gaの後裔である。そして、人称代名詞の三人称単数sinumaはsineh「一つ・一人」に*-maが付加されたものであり、本来は「一人の人により」という意味を表した。一方、不定人称単数asinumaは、同じsinehにまず存在動詞のa-が付き、それに具格接辞の*-maが付いたものであり、その本来の意味は「ある一人の人により」であった。

このような仮定は、エスキモー語の人称代名詞を観察することによってその裏付けを得ることができる。グリーンランドエスキモー語の一人称代名詞絶対格ŋaはngaとも表記できるが、これは具格接辞*-gaと酷似している。また、アラスカエスキモー語のkaも*-gaと形がよく似ている。一方、一人称単数関係格のmaは具格接辞*-maと同形である。エスキモー語では、二つの具格接辞のうち的一方が絶対格に、他方が関係格に振り分けられた可能性がきわめて高い。⁵

次に、チュクチ語の一人称複数絶対格mu'riについて述べる。mu'riの構成は、おそらくma-ur-iであった。すなわち、具格接辞*-maを引き継いだma-は「私」、-urは複数接辞で「ら」、-iは具格接辞で「で」という意味、つまり全体で「私らで」という具格的意味を表すのが本来の用法であったろう。しかし、その意味が弱まった結果、新たに-ma'nという具格接辞が加えられてきたのが能格形のmorgma'nであろう。なお、エスキモー語の一人称複数絶対格kkaとnkaもとの形は*kakaと*ŋakaであったかもしれない。

さて次に、二人称代名詞の成り立ちを考える。まず、チュクチ語の二人称単数絶対格のgitは存在動詞it-と関係がありそうである。すなわちgitは、具格接辞*-gaに由来するg-に存在動詞it-が付されたものであり、本来はこれに連用接辞の-iが付いて「あなたあり(て)」という意味を表したものと思われる。能格のgima'nは*gitma'nの短縮形であろう。ところで、エスキモー語の二人称複数関係格のwitとfitは*-gaをw-、f-という形で残しているが、絶対格のitはそれを完全に失っている。

チュクチ語の二人称複数絶対格のtur'iは語頭のt-が問題である。エスキモー語の二人称にも現れるこのt-の祖形は*ti-である。そして、この*ti-はアイヌ語の一人称複数と二人称

複数に現れる *ɕi-* の祖形でもある。したがって、**ti-* は一方で *ɕi-* になり、もう一方で *t-* になったことになる。前にも述べたように、*ɕi-* は奪格接辞に由来する具格接辞であったと思われるので、*t-* もそういうものとして理解すべきであろう。⁶ そこで、*tur'i* の成り立ちは以下のものであったと想定される。すなわち、「あなた」がゼロ形態として含意された * ϕ -*t* あるいは * ϕ -*ti* が最初にあって、次に **t* あるいは **ti* が「あなた」という意味を獲得し、続いてそれに *-ur* 「ら」という複数接辞が付いて **tur* あるいは **tiur* という語が成立し、最後に具格接辞の *-i* が付加されて *tur'i* という形になった。なお、チュクチ語の *tur'i* に対応するエスキモー語は *tit* と *tin* である。このうち *tit* はおそらく *ti* を二つ重ねた **titi* に由来する形であり、*tin* は *ti* に *-n* (< **na* < **-ŋa* < **-nga* < **-ga*) が付いたものである。

三人称代名詞に話を移そう。チュクチ語の場合、三人称代名詞の成り立ちは単純である。単数絶対格および能格の *Ena'n* は *E-* と *-Ina'n* とが結合してできた形であろう。複数絶対格の *E'mri* の形成過程は三人称の *tur'i* の場合と同じである。すなわち、「彼・彼女・それ」が含意された * ϕ -*E* がはじめにあって、次に *E* が「彼・彼女・それ」という意味を表すようになり、続いて複数接辞 *-ur-* が付いて **Eur* 「彼ら・彼女ら・それら」という語ができ、さらに具格接辞が付されて *E'mri* になったと考えられる。

エスキモー語の三人称代名詞も具格接辞がその基本的な構成要素となっている。単数絶対格の *a* は *e* の変異形であろう。複数絶対格の *ee* は明らかに *e* を重ね合わせたものである。*ai* は *a* と *e* を重ねてできた形かもしれない。一方、関係格の諸形態に関してはそれらがどのように形成されたのか詳しくは分からない。

ここまで本節では、アイヌ語とチュクチ語とエスキモー語の人称代名詞についてその成り立ちを論じてきた。その結果、これらの言語における人称代名詞の起源は、起源不明のいくつかを除けば、1) 単一の具格接辞、2) 複数の具格接辞の組み合わせ、3) 存在動詞と具格接辞に由来する連用接辞との組み合わせ、のいずれかに求められることが判明した。これは驚くべきことである。というのも、地理的に遠く隔てられたアイヌ語とエスキモー語とが人称代名詞の語構成において酷似しているという事実は、アイヌ語に隣接するツングース諸語や日本語にも、そしてエスキモー語に隣接する北米インディアン諸語にも、同じ状況の存在することを暗示するからである。

北米インディアン語を調べてみると、案の上、エスキモー語との間に多くの一致点が見いだされる。たとえば、能格言語のサイウースロー語では *q* あるいは *qa-* という形態が能格接辞として用いられる。これはエスキモー語の *ka* に近似している。またサイウースロー語では、*-tc* を具格接辞として *tci-wa'tc* 「水で」のように用いるが、この *-tc* はエスキモー語の *t* (< **-ti*) と同源であろう。

クース語には *x-* という能格接辞がある。これはサイウースロー語の *q-* が摩擦音化した

ものであると考えてよい。x-は-etcと連携してx-mi'iaq-etc「弓で」のように具格接辞としても用いられる。-etcは、具格接辞を二つ重ねた-e-tcから成る。

さて、チヌーク語では*-ga、*-ma、*-tiに由来する形態が人称接辞として使われる。

表 6 チヌーク語の人称接辞⁷

	絶対格	能格
一人称単数	n-	n-
両数	包含形	txg-, txk-
	排除形	ntg-, ntk-
複数	包含形	lxg-, lxk-
	排除形	ntcg-, ntck-
二人称単数	m-	m-
両数	mt-	mtg-, mtk-
複数	mč-	mčg-, mck-
三人称単数男性	i-	tč-
女性	a-	g-
中性	L-	Lg-, Lk-
両数	č-, čt-	čg-, čk-
複数	t-, tg-, ō-, n-, a-	tg-
不定人称		q-

表 6 の絶対格の欄を上の方から見てみよう。n-は、*-ga > *ŋa- > *na- > n-という変化の結果であろう。tx-はおそらく、t-(< *-ti)とx-(< *-ga)とが合わさったものである。lx-はエスキモー語のraと同源ではあるまいか。そうであれば、*-gaの後裔ということになる。ntc-は上記のn-とtč-(< *-ti)とが結合したものにちがいない。m-は*-maの後裔で、mt-はm-にt-(< *-ti)が付いたもの、mč-はm-にč-(< *-ti)が付いたものと考えられる。そして、i-は具格接辞*-jiに連なるものであろう。L-は上のlxと同源と見なしてよい。a-やō-は*-gaに遡るものではあろうが、確かなことは分らない。

次に能格を見てみよう。能格に特徴的な形態は、g-とk-である。これは*-gaの後裔にちがいない。ところで、g-あるいはk-が付くのは概ね両数と複数である。したがって、チヌーク語の-gとk-は日本語で「私とあなたとでそれをしよう」などと言うときの「で」に相当する意味、つまり「共同の行為者」を表す具格的意味を残していると言えるかもしれない。

北米インディアン諸語の人称代名詞が具格接辞を基盤にしていることを示す事例として、最後に、ダコタ語の人称代名詞に触れておく。ダコタ語における人称代名詞の組織は、以下のようにきわめて簡素である。

表7 ダコタ語サンティー方言の人称代名詞⁸

	絶対格	活格
一人称	ma、mi、m	wa
二人称	ni、n	ya
包含形 ⁹	u ⁿ	u ⁿ

ダコタ語は活格言語である。そこで、状態を表す自動詞文の主語と他動詞目的語には絶対格があてられ、他動詞文主語と行為を表す自動詞文の主語には活格があてられる。ここで問題とするのは絶対格形と活格形の出自である。まず、絶対格の一人称maとmは明らかに*-maの後裔である。miはmに具格接辞の-i(< *-ji)が付いたものかもしれない。二人称のnは*-gaの後裔で、*ga > *nga > *ŋa > *na > nという変化を経たものであろう。niの-iは、miの場合と同様、具格接辞*-jiに遡るものかもしれない。包含形のuⁿは、二人称nの延長形*unを経由して生まれた形であろう。

活格形waとyaも具格接辞と関係がある。ダコタ語と同じスー語族に属するポンカ語でwaとyaに対応する形がhaとraであることから判断して、これらの起源も*-gaに求めるのが妥当であるように思われる。それはともかくとして、waとyaがもともとは具格接辞であったことを裏付ける根拠をサイウスロー語から得ることができる。¹⁰ 上にtci-wa'-tc「水で」という例をあげたので、ここでは具格接辞の-yaを用いたtcimtca'm-ya-tc「釜で」とqal-tc-ya「ナイフで」という例をあげておこう。なお、ダコタ語では-neをtcil-ne「手で」のように具格接辞として用いるが、この-neは二人称絶対格のniあるいはnと無縁ではなさそうである。¹¹

以上で北米インディアン諸語についての考察を終え、ここからはまた東アジアに目を転じる。アイヌ語やチュクチ語、エスキモー語や北米インディアン諸語に見たような特徴がはたして東アジア諸言語に広く見られるか。この疑問に答えることを本稿の最後の課題としよう。

ここで取りあげようとする言語は、満州語を含むツングース諸語、朝鮮語、日本語、それにツングース諸語と比較するための中期モンゴル語である。まずはじめに、ツングース諸語の中の三つの言語、すなわち、オルチャ語、ウイльта語、満州語と、中期モンゴル語の主格人称代名詞を以下の表8によって比較する。

表 8 ツングース諸語と中期モンゴル語の主格人称代名詞¹²

	オルチャ語	ウイльта語	満州語	中期モンゴル語
一人称単数	bi	bii	bi	bi
複数	bū、buə	buu	bə、musə	ba、bida
二人称単数	si	sii	si	či
複数	sū、suə	suu	suw,ə	ta
三人称単数	nānɪ、nān	nooni	(i)	*i
複数	nāu	nooči	(čə)	*a

さて、この表から何が分かるか。この表が意味するものは、ここまでの考察によって得られた知見、あるいはここまでの議論を支えた仮定と矛盾しないか。このような観点から、まず最初に一人称単数形を見てみる。biあるいはbiiという形からすぐに思い浮かぶのは存在動詞のbi「ある・いる」である。ツングース諸語のすべてにおいて、そして中期モンゴル語においても、存在動詞はbiである。そこで、次のような仮定が導かれる。ウイльта語のbiiは、具格接辞に由来する連用接辞-i(< *-ji)が存在動詞のbiに付いたものである。すなわち、biiは「私」がゼロ形態として含意されたものであり、その本来の語構成はφ-bi-i「φあり(て)」であった。また、オルチャ語、満州語、中期モンゴル語のbiは、biiが「私」という意味を明示的に表すようになった後で末尾の-iを脱落させたものである。

一人称複数の特徴は語尾の-uあるいは-aである。これは、アイヌ語で「対になった二つ」を表すときのu¹³と同源かもしれない。またそれは、チュクチ語の人称代名詞tur'i「あなたたち」を構成する複数接辞-urの-uと同源かもしれない。¹⁴ 満州語のmusəはm(< *-ma)とuとsə(< *-ci)とが合わさったものではないかと思われる。

次に二人称についてツングース諸語とモンゴル語とを比べてみると、siの前身はčiであることが知られる。¹⁵ ウイльта語のsiiは、biiの類推でsiに-iが加わったものであろう。ところで、čiの前身は*tiである。これは中期モンゴル語の二人称複数がtaであることによって分かる。ここで改めて言うまでもなからうが、*tiは尊格接辞に由来する具格接辞*-tiを基盤にしたものである。ちなみに満州語では、čiがたとえば、morin či ehufi「馬よりおりて」のように今でも尊格助詞として用いられる。これは、čiからsiへの形態変化と「~より」から「~により」への意味変化、そして「~により」から「あなたが」への意味変化が並行して起こり、古い形態が古い意味を保持し、新しい形態が新しい意味を担うようになったことを物語っている。要するに、形態分化と意味分化とが同時に起こったということである。なお、満州語の二人称複数suw,əという形の由来は分からない。

三人称については一人称と二人称ほどには問題が単純ではなさそうである。オルチャ語に見られるnā-、ウイльта語に見られるnoo-は、具格接辞*-gaが*-ŋaを経てきた形であろう。-niは*-jiに由来する-iの交替形と見てよからう。nātrの-trとnoočiの-čiは明らかに*-tiの後裔である。満州語のiは*-ji、čəは*-tiに遡るが、これらは指示代名詞にほとんど完全に駆逐されてしまっている。中期モンゴル語の*iと*aは斜格形に基づいた推定形である。¹⁶これらは、すでに中期モンゴル語の段階で指示代名詞によって完全に駆逐されてしまっていたのかもしれない。

さて次に、朝鮮語における人称代名詞の成り立ちを考えてみる。以下の表は中期朝鮮語と現代朝鮮語の人称代名詞を並べたものである。

表9 中期朝鮮語と現代朝鮮語の人称代名詞¹⁷

	中期朝鮮語	現代朝鮮語
一人称単数	na	na, čə
複数	uri	uri (duur)、čəhwi (duur)
二人称単数	nə	nə
複数	nəhwi	nəhwi (duur)
三人称単数	čə	ku
複数	čəhwi	kuuur

これらの形態の出自は次のとおりである。まず、一人称単数na「私」、二人称単数nə「あなた」、そして二人称複数nəhwi「あなたたち」のnəについて言うと、これらはモンゴル語における一人称代名詞の斜格を構成するna-と同様に、具格接辞*-gaが*-ŋaを経て生まれた形であろう。具格接辞が人称代名詞化したものは、他の言語について述べたのと同様に、ゼロ形態として含意された「私」「あなた」という意味を具格接辞が引き受けるようになったからである。

次に一人称複数uri「私たち」について言うと、これはチュクチ語の一人称複数mur'i「私たち」と語構成がもともと同じであったと考えられる。すなわちuriは、具格接辞*-maに由来する*ma「私」に複数接辞-urと具格接辞-i(<*-ji)が付いてきた*muriが語頭のm-を脱落させたものではあるまいか。このm-を、筆者は満州語における一人称複数musəのm-と同じものであると推定する。

次に二人称複数nəhwiの-hwiは何かと言うと、これはもともと具格接辞の-i(<*-ji)であった。つまり、本来は具格接辞であったnəが人称代名詞となったため、その埋め合わせとして具格接辞の-iが付せられたのである。この-iはしかし主格接辞化した。金恩燁

(1981 : 191) が *nə* の主格および持格 (= 所有格) としてあげている古期朝鮮語の *nəj* は *nə* に主格接辞としての *-j* が付いたものである。しかし主格接辞としての *-i* も、*nə* の後では、主格接辞であることが忘れられ、複数接辞と見なされるようになった。この変化を惹起した要因の一つとして、一人称複数の *uri* による類推作用があげられよう。もう一つの要因として主格接辞 *ga* の出現があげられる。つまり、*ga* の出現により *nə* の後の *-i* の複数接辞化に拍車がかかったのである。

三人称の単数 *čə* と複数 *čəhwi* の関係は、上述の *nə* と *nəhwi* の関係と同じである。*čə* は具格接辞 **-čə* (< **-či* < **-ti*) に遡る。すなわち *čə* も、ゼロ形態として含意された三人称単数の意味を失った代償として具格接辞の *-i* が付加されたのである。この *-i* は主格接辞となったが、主格接辞であることも忘れられ、複数接辞となった。この変化の過程は *nəhwi* の場合と少しも変わらない。

さて次に、現代朝鮮語の人称代名詞について三つのことを述べておきたい。一つは *-dur* が何かということ、もう一つは中期朝鮮語の三人称単数 *čə* と三人称複数 *čəhwi* が現代朝鮮語において何ゆえに一人称単数と一人称複数を表すようになったかということである。そしてもう一つは、三人称の単数 *ku* と複数 *kədur* の出自についてである。

第一の問題は簡単である。*-dur* は紛れもない複数接辞である。第二の問題は難しい。しかし、現代朝鮮語における *čə* と *čəhwi* が謙讓語であるという事実に基づいて、次のような変化が起こったことを仮定できる。すなわち、一人称としての *čə* と *čəhwi* の使用は話し手が第三者を侮るような方法で自分を卑化しようとしたことに始まったものである。いわば、「あいつ」「あいつら」という侮蔑的な表現が「私め」「わたしども」という謙讓表現に変わったのである。さて第三の問題は第二の問題と深くかかわっている。すなわち、現代朝鮮語における三人称単数 *ku* と *kədur* は、*čə* と *čəhwi* が一人称代名詞となったためにできた空白を埋めるためのものであった。ところで、*k* はアイヌ語人称接辞 *k-* と同源で具格接辞 **-ga* に由来するものでないかと思われる。

ここまで **-ji* と一緒に **-ga* と **-ma* と **-ti* を具格接辞として想定することによって、それらの後裔が多くの言語において人称代名詞の主要な構成要素となったことを論じてきたが、いよいよ最後に日本語の人称代名詞の成り立ちについて述べておく。ここで取りあげるのは上代語における以下の形態である。

一人称「私」 : *na*, *wa*, *a*, *ware*, *are*

二人称「汝」 : *na*, *nare*, *i*, *si*, *nusi*

三人称「それ」 : *si*

これらのうち簡単に説明ができそうなのは *na*, *i*, *si*, *nusi* である。一人称と二人称の

naは、朝鮮語のna「私」、na「あなた」と同源にちがいない。つまり、*-gaが*ŋaを経て成立したものと思われる。また、iは*-jiの後裔であり、siは*-tiの後裔である。nusiは、naの異形態nuとsiとが合わさったものであつたらう。

説明が難しいのはwaとa、そしてwaraとareとnareである。まずwaとaについて言うと、その起源は次のように推定される。すなわち、ツングース諸語において*φ-bi-i「φあり(て)」という表現から「私」を意味する*biiが生まれたように、原日本語でも「私」を意味する代名詞として*biiが成立した。この*biiは*biとなり、*bu > *wu > *u¹⁸という変化をたどってwaとaになった。そしてそのwaとaに存在動詞ari「ある・いる」の已然形areが付加されて、wa-areとa-areという表現が生まれた。そしてwa-areとa-areは重なった二つの母音の一方を脱落させてwareとareになった。言うまでもなく、nareもna-areの縮まった形である。ところで、已然形というのは「～であるから」という意味を表すことができたので、wareとareの原義は「私のことだから」、nareの原義は「あなたのことだから」であつたと考えられる。

ware、are、nareの成立に存在動詞がかかわつたというのは推定である。しかし、全く根拠のない推定ではない。『古事記』で「故^{かれ}」という語が「そこで」という意味で用いられているが、大野 晋(1982:289)はその語の起源を以下のように説いている。

カレというのは、カアレのつまった形であらう。kaare kare(上代日本語では、母音が二つ重なることを嫌つたので、こういう場合は一方が脱落したのである。)カアレの力は、カレ(彼)・カナタ(彼方)・カシコ(彼処)などの力であり、アレは「有り」の已然形であると思われる。上代では已然形は、それだけで、……デアルカラという既定条件を示すことができる形であつたから、カアレとは、ソウアルカラ、ソウダカラというような意味を表した。それが少し転じて、ソコデという位の意味になつたのである。(289頁)

ここで述べられていることが正しければ、waとaにareが付属してareとnareが成立した可能性はきわめて高いと言えよう。

以上、本稿では具格接辞*-jiの後裔が上代日本語で動詞接頭辞i-となり、アイヌ語で動詞接頭辞e-となっていることを見た後に、同じ形態が、具格接辞*-ga、*-ma、*-tiの後裔とともに、多くの言語において人称代名詞の主要な構成要素となつたことを論じた。アイヌ語、チュクチ語、エスキモー語、北米インディアン諸語、ツングース諸語、モンゴル語、朝鮮語、日本語の人称代名詞がその構成において本質的に同じであるということは、これらの言語がはるか昔に同じ源流から発したものであることを物語っている。

注

- 1 ボアズ (1911a : 529) に準拠した。
- 2 田村すず子 (1988 : 22) に準拠した。
- 3 ボゴラス (1922 : 720) に準拠した。
- 4 サルピツター (1911 : 1021) に準拠した。
- 5 普通名詞の関係格は -m という語尾によって表す。この -m も、具格接辞 * -ma の後裔にちがいない。
- 6 チュクチ語では名詞の奪格接辞は -it である。この -it に * -ti の本来の意味が保持されていると考えられる。
- 7 ボアズ (1911b : 580 - 584) に準拠した。
- 8 ボアズ&スワントン (1911 : 908) に準拠した。
- 9 包含形は、「あなたと私」「彼と私」のような「私」を含む複数の者を表す。したがって、包含形は「私たち」という意味を表すと見なしてよさそうである。
- 10 アイヌ語では、wa を「走って行く」と言うときの「て」に相当する接続助詞として用いる。(方言によっては、wa の代わりに teh, tek が用いられる。)カラフトアイヌ語で、具格助詞の ani を「て」に相当する接続助詞として用いるという事実と重ね合わせると、かつてのアイヌ語において wa が具格助詞として用いられていた可能性を示唆する。ちなみに、アイヌ語の格助詞としての wa は「～から」という奪格的意味を表す。
- 11 マイドゥ語では、-ni が具格接辞で、ni が「私」という意味の人称代名詞である。
- 12 ツングース諸語については池上二良 (1988 : 1080) に、中期モンゴル語については小沢重男 (1997 : 54-55) に準拠した。
- 13 u-sik 「両目」、u-sek 「両手」のように、一対の形で存在するものに対して u- を付けてその両方を表す。
- 14 満州語では * -ma の後裔を含む代名詞は musə だけであるが、モンゴル語ではたとえば namayai 「私を」とか namača 「私から」のように、人称代名詞のほとんどの斜格形において -ma (< * -ma) が語中に現れる。なお、モンゴル語の一人称属格 minu 「私の」は * binu が変化した形であるとして一般に考えられているようだが、筆者はこの mi も * -ma の後裔であると思いたい。
- 15 このことから、先の 表 2 に示したアイヌ語の一人称複数主格人称接辞 -as が -a + -s (< * -ci) という構成であることが明確になる。
- 16 i が三人称単数主格であったという仮定は、inu 「彼の」が i 「彼」 + nu 「の」という語構成であったことから導かれる。同様に、anu 「彼の」が a 「彼ら」 + nu 「の」という語構成であったことから、a が三人称複数主格であったという仮定が導かれる。
- 17 中期朝鮮語の人称代名詞に関しては、金芳漢 (1985 : 194) を参考にした。
- 18 ミラー (1986 : 75) は、上代語の存在動詞 u 「ある・いる」が * bii > * wu > u という過程を経て成立したとしている。u は ari 「ある・いる」の a に変化したのであるから、人称代名詞の a と wa が存在動詞から生まれたとする考えは途方もない仮定ではない。

引用文権

- 池上二良(1989)「ツングース諸語」亀井 孝・河野六朗・千野栄一編著『言語学大事典』第2巻:
1058-1083 三省堂
- 大野 晋(1982)『仮名遣と上代語』岩波書店
- 小沢重男(1997)『蒙古語文語文法講義』大学書林
- 金 恩燁(1981)『古代朝鮮語と日本語』大興出版
- 金 芳漢(1985)『韓国語の系統』(村山七朗・大林直樹訳)三一書房
- サルピツター Thalbitzer, William (1911) Eskimo. In Franz Boas (ed.) *Handbook of American Indian languages*. part 1: 967-1069. Washington: Government Printing Office.
- 田村すず子(1988)「アイヌ語」亀井 孝・河野六朗・千野栄一編著『言語学大事典』第1巻: 1-94
三省堂
- 知里真志保(1974a)『知里真志保著作集』第3巻 平凡社
(1974b)『知里真志保著作集』第4巻 平凡社
- ボアズ Boas, Franz (1911a) Kwakiutl. In Franz Boas (ed.) *Handbook of American Indian languages*. Part 1:
423-557. Washington: Government Printing Office.
(1911b) Chinook. In Franz Boas (ed.) *Handbook of American Indian languages*. Part 1: 557-677.
Washington: Government Printing Office.
- ボアズ&スワントン Boas, Franz and John R. Swanton (1911) Siouan: Dacota (Teton and Santee Dialects). In
Franz Boas (ed.) *Handbook of American Indian languages*. Part 1: 875-965. Washington: Government
Printing Office.
- ボゴラス Bogoras, Waldemar (1922) Chukchee. In Franz Boas (ed.) *Handbook of American Indian languages*.
Part 2: 631-903. Washington: Government Printing Office.
- 村崎恭子(1976)『カラフトアイヌ語』国書刊行会
- ミラー Miller, Roy Andrew (1986) A modest proposal on the origin of Japanese. 馬淵和夫編『世界の言語学
者による日本語の起源』57-103. 武蔵野書院